海の論理

――想像力と信仰――

安富信哉

一

『教行信証』には、一貫して流れる二つの鮮明なイメージがある。それは海と光のイメージである。

窮に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。（総序）

この象徴的な冒頭の一節は、海と光の対句によって、著作全体の基調を予示し、明快に滑り出している。親鸞の思想的背景にまったく不案内な者も、この書を読み進むにつれて、海と光が織りなす幽邃な表情にやがて眼を奪われるに違いない。

光。『教行信証』の一読者は、その印象を「光の洪水」と端的に語った。この指摘は決して誇張とは言えまい。もし親鸞の著作の語彙をリスト・アップするなら、光にまつわる言葉はおびただしい数に上るだろう。だがそれは言葉だけの問題なのか。そうではなく、この事実は、親鸞が全存在を懸けて光を捜し求めたことの左証である。親鸞は光に飢えていた、というほかない。逆に言い直せば、親鸞は自身が底知れぬ闇の只中に投げ出されてあることを、異常なまでに鋭く知覚したのであった。

九歳に出家。家庭の幸福には生涯縁が薄かった。彼が目撃したものは、疫病・飢餓・政変などの悲惨な世相であった。また末法到来を如実に告げる念仏弾圧は、法然ともども苦難のどん底に叩き込んだ。しかしながら、外部の情況だけではなかった。何よりも我が身が苦しかった。人間としての様々な欲望、悪性、罪業性などの内奥の現実が鋭敏な意識の表層に止めどなく湧き上ってきた。要するに、親鸞が生存の暗さを肌身に感ずる要因は、あまりに多かったのである。その全著述に汪溢する光は、彼の通ってきた闇の深さを逆説的に証明する。如来、名号、浄土、智慧、慈悲、信心、これらはすべて、親鸞には光明の相であった。この光に親鸞は、照らされ、浄化され、救われたのである。

そして海。《人間の血液は、海水と同じ組成を持って海の痕跡をとどめている。遺伝的には、人間は海からの進化を遂げているのである。海は地球の表面積の三分の二を覆い、水産・鉱物資源の無尽蔵の宝庫である。そのなかで生命は栄え、滅び、また栄える。海上の船は、遠距離への移動を容易にし、限りない恩恵を人類に施こしている》

〈海〉というイメージに、親鸞は何としばしば自分の想いを仮託したことか。〈海〉は全述作で百四個所に用いられ、その種類は三十二種に及ぶといわれる（森竜吉『親鸞随想』）。生死海、

群生海、無明海、願海、大信心海、光明海、功徳大宝海、一乗海。そしてこれらの語に付随する無数の縁語。たとえば船、波、河、沈没、流転、など。それはたんなる喩えとか修辞というような生易しいものではない。何かことのほか切実な感情を〈海〉という実体に懐いていたとしか考えられない。

いったい海は親鸞の内面にどのような影を落していたのか。親鸞は海に何を学んだのか。

＊　＊　＊

もともと東洋には、自然を尊敬し、自然に学ぶという伝統がある。それゆえ〈海〉が譬喩として仏教に取り入れられることも不思議はない。われわれは仏教の歴史に〈海の系譜〉を辿ることも不可能ではない筈である。

比丘たちよ、ガンジス河、ヤムナ河、アチラバテ河、マーヒ河などの大きな河は、たとえどんなにその数が多くても、大海に流れ込むや、もとの名ともとの流れを失って、ただひとつの名「大海」になる。それと同じように、比丘たちよ、四つのカースト、貴族、ブラフマン、ヴァイシャ、スードラは、完全なる者が説かれた法と教えとに随って、家を捨て、出家者になるならば、もとの名前やもとの家柄を失って、「釈迦族の息子を信奉する苦行僧」という、ただひとつの名称をうることになる。

（オルデンベルグ『仏陀』）

『仏陀』は初期仏典の忠実な引用によって、釈尊の生涯と思想をまとめた、もはや古典となった労作であるが、右の一節では差別を越える仏教の立場が海の譬喩によって明瞭に説き示されている。やがて分るように、この話法は後世まで継承される。

海の譬喩が大乗仏教以降ステレオ・タイプ化してきたのは事実である。『涅槃経』獅師吼品には海の八不思議が説かれ、『華厳経』十地品には海の十徳が列挙してある。だが親鸞への直接の影響ということになると、やはり中国浄土教の先駆者曇鸞の解釈を見逃すことはできない。

「海」とは、言ふこころは、仏の一切種智は深広にして涯無し、二乗雑善の中・下の屍骸を宿さず。之を「海の如し」と喩ふ。是の故に「天人不動の衆は清浄の智海より生ず」と言へり。

（『浄土論註』衆功徳成就）

この言葉は、世親『浄土論』の「天人不動衆清浄智海生」を解釈した箇所である。この解釈に照らして、親鸞は一乗海論を展開した。この一乗思想と海のイメージの結合は親鸞に重要な意味をもつ。それについては後に触れよう。

又「性」と言ふは、是れ必然の義、不改の義なり。海の性は一味にして、衆流入る者必ず一味と為り。海の味彼に随ひて改まらざるが如し。

（同　性功徳成就）

親鸞がしばしば披瀝した「海一味」の考え方は、この箇所が原型である。われわれは「海一味」の思想に関しても同様の注意を払う必要があるだろう。

ところで、日本の仏教者のなかで、親鸞と対蹠的な位置にあ

る思想家は道元である。かつて村上専精氏が親鸞を〈海の人〉、道元を〈山の人〉と呼んだのは有名な話だが、この呼称は鎌倉仏教両雄の端的な印象をどこか言いあてた感がある。だが村上氏の発想が何を手掛りにしたのか定かではない。道元が崇高・高潔、親鸞が深遠・深刻、ということか。「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静なり。知者は楽しみ、仁者は寿ながし」(『論語』雍也)。この孔子の箴言があるいはヒントになっているのかも知れない。しかし〈山の人〉道元にも海のイメージを借りた表現は決して少なくない。

たとへば、船にのりて山なき海中にいでて四方をみるに、ただまろにのみみゆ。さらにことなる相みゆることなし。

(『正法眼蔵』現成公按)

道元のこの譬喩について、「おそらく、道元が、入宋の時も帰朝の時も、つぶさに経験したであろうと思われる、大洋の真只中に置かれた時の展望を手がかりとして説きつくしている」と西尾実氏は推測している(『岩波古典文学大系81』)。周知のように、とくに山水経(『正法眼蔵』二九)にあっては山水に事寄せて絶対の真実が語られる。またほかには次のような条(くだ)りが見出される。

このむねをしるものは、従来の生死ながくたえて、この身おはるとき性海にいる。性海に朝宗するとき、諸仏如来のごとく好徳まさにそなはる。

(同 弁道話)

道元は、すべての川が海に集まるのを、諸侯が天子に拝謁して、帰服の意を示すのに喩え、人間も輪廻が終熄するとき本性の世界に帰すると説いている。海の伝統的な話法はここにも生きている。

* * *

親鸞の場合、越後流罪という事件が海に関心を寄せる大きな契機になった——とは、もはや打ち消しがたい通説であるかにみえる。親鸞が五年間の流刑生活を送った国府は、日本海の居多浜に面した海村である。親鸞はこの辺地で自然に密着して逞しく生きる「いなかのひとびと」を知った。越後の野人は『大無量寿経』の〈群萌〉という語が実に似つかわしい民草であったろう。この北越の配所にあって京洛の知識人親鸞は、リアルに現実を直視する眼を養った。そして苦難の生活のなかで、ひたすら魂を磨くことに専念した。その姿には都の月を懐しんで、和歌を詠じた上流人の影はなかった。ときには浜辺に出て、潮焼けした漁夫と談笑したり、千変万化する海の雄大な景観に長い間魅入られることもあった、と考えてよいだろう。中世人親鸞にとっては、海は、現代人にとってより、余程謎めいた実体であったに違いない。

北国の冬は荒天で、強く北西、シベリアの方角から季節風が雪を混えて吹きまくる。冬の日本海は、時折手のつけられぬ高波を生じる。豪雪はすっぽりと白一色に大地を覆い尽し、自然の営なみを押し潰す。このような毎日を、人々は家に籠り、飢えや厳しい寒さと闘いながら、じっと耐え忍ぶのである。しかし春の訪れとともに、風は凪ぎ、海は平静さを取り戻して、水

はどこまでも蒼々と澄み渡る。海の民は、「海河に網をひき釣をして世を渡る」（『歎異抄』）。このような大自然の猛威と優しさに折々身を接っした親鸞が、海のイメージを意識の深層に胚胎していったことは、想像にかたくない。だがその期間の親鸞の心境や行実を現在に伝える史料はない。われわれとしては、ただ聖人自らの著述を手引として、海が思想の上にどのような意味を偲せているか推し量ることができるだけである。

二

親鸞の眼に映った海の風景は、心のなかにどのようなパノラマを繰り広げたのか。一見したところ、その著述に描かれる〈海〉には、魚が泳いだり、鷗が飛んだりはしていないようである。ただ眼も眩むほどに明るい海と、タールを流したような暗い海が見えるばかりである。「唯説弥陀本願海　五濁悪時群生海」（正信偈）。この対句は親鸞の〈海〉を端的に語っている。この頌に象徴されるのは、光に満ちた〈昼の海〉と漆黒の〈夜の海〉である。無明海、煩悩海、宝海、光明海など、いずれもどちらかのタイプに帰属する。

然るに無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽無く、法爾として真実の信楽無し。是を以て、無上の功徳、値遇し難く、最勝の浄信、獲得し難し。（信巻）

古来、仏教によれば有情界はことごとく迷妄に沈淪していると洞察される。「群生海」「無明海」という語は、仏教のこの根本的な存在把握に由来する。〈海〉は、その場合、迷妄の深さ広さを象徴する適切なイメージである。〝われらはこの漠とした暗い生命の海に漂没して、自我執着の地獄から抜け出せず、人として持つべき真実の心を失っている。だがそれにつけても、如来の真実義を解し真実の心をわが身に体得することは、何と困難なことであろうか〟。このような悲嘆の声を右の一節に聞きとることができる。

輪廻と海のこのような連想は、「十方六道、同じく此れ輪廻して際無し、循循として愛波に沈んで、苦海に沈む」（『法事讃』）という善導の言葉からも察することができるが、この連想の起源はよほど古くまで溯るのではないか。親鸞の場合、この現実把握の背景には、粉れもなく末法動乱の世相が見える。

菩提をうまじきひとはみな
専修念仏にあだをなす
頓教毀滅のしるしには
生死の大海きはもなし（正像末和讃）

親鸞にとって、苦とは決して観念ではなく、存在の深奥から湧き上る実感であった。菩提心を求め、教法を実践すべき人々が、念仏弾圧の非道に狂奔するという顚倒の世相である。「具縛の凡夫・屠沽の下類」（『唯信鈔文意』）とは、悪世の業報に喘ぐ、人間の赤裸々な姿である。無明長夜のほとりなき苦海。この悲調の韻律は、通奏低音として、親鸞の語る言葉の隅々にま

で重苦しく流れている。

誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近くことを快まず。恥ず可し、傷む可し矣。

（信巻）

われわれはこの親鸞の告白を解釈する必要はない。この「愚禿悲歎述懐」は、あまりに人口に膾炙されているが、空虚な説明を要しない、叫びを感じさせる言葉である。

ところが他方から見れば、この生死海こそ如来の慈悲と智慧が本来的に働らく場である。〃生死海の現実を離れて如来の廻向が顕現する世界はない〃。これは親鸞の確信である。

仏意測り難し。然りと雖も竊に斯の心を推するに、一切の群生海、無始より已来、乃至今日・今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無く、虚仮諂偽にして真実の心無し。是を以って、如来、一切苦悩の衆生海を悲愍して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざる無く、真心ならざる無し。如来、清浄の真心を以て、円融・無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て、諸有の一切煩悩・悪業・邪智の群生海に廻施したまへり。則ち是れ利他の真心を彰すが故に、疑蓋雑ること無し。斯の至心は則ち是れ至徳の尊号を其の体と為せるなり。

（同）

群生海とは、苦悩・悪業・邪智が満ち満ちた、いわば、無始以来の煩悩によって汚染された海である。この海はよどんで悪臭を発散している。だが右の「三心実義問答」によると、生死海にこそ如来はその慈悲にあふれた姿を現わすのだ、と明言される。法蔵菩薩の不可思議兆載永劫にわたる修行とは、如来の〈至心〉が――また〈信楽〉〈欲生〉が――衆生に廻施されて、永遠に「有情煩悩海」を洗い清めていくという働らきである。その情景は、清冽な湧き水が断え間なく底から噴き出して、濁り水を透明に澄ませてゆく水のドラマを想起させる。

＊　＊　＊

不思議なことに、如来（菩薩）の故郷もまた海に帰せられている。海から誕生した如来。それは泡だつ海底から湧き上った海神（わだつみ）、アフロディテやヴァルナの幻想を彷彿とさせるではないか。前述したように、『浄土論』には「天人不動の衆は清浄の智海より生ず」という頌がある。恐らく親鸞の「大心海より化してこそ、善導和尚とおはしけれ……」という和讃は、この措辞法を継承したものであろう。のみならず法蔵菩薩の故郷もまた〈海〉であると親鸞は説くのである。

この一如宝海より形をあらはして法蔵菩薩となのりたまひて、無碍の誓をおこし給ふをたねとして阿弥陀仏となりたまふが故に「報身如来」と申すなり、これを「尽十方無碍光仏」と名けたてまつれるなり。この如来を「南無不可思議光仏」とも申すなり。この如来を「方便法身」とは申す

なり。「方便」と申すは、形をあらはし、御名を示して衆生に知らしめんとなり。　（『一念多念証文』）

「一如宝海」も「群生海」も、両者ともに〈海〉である。だがこの二つの〈海〉を切り離して考えてしまうのは、大乗仏教の原則に反する。煩悩即菩提の自覚に照らせば、「群生海」即「一如宝海」でなければならぬ。「凡夫の迷いと仏の悟りの両極の世界を同じく海に譬えているのは、仏の本願海が迷いの無明海とは別の所にあるのではなく、迷いの無明海にこそ大慈大悲の本願海が感得せられるのである」（揖由美子「三願転入について」『親鸞教学』28号）。

〈宝海〉という語は、親鸞の著作中にしばしば見受けられる。こころみに行巻から引用してみよう。冒頭に真実行を名づけて「極促円満す、真如一実の功徳宝海なり、故に大行と名づく」とあり、不廻向行を「大小の聖人・重軽の悪人、皆同じく斉しく選択の宝海に帰して、念仏成仏す応し」と釈している。さらに正信偈には「功徳の大宝海に帰入すれば、必らず大会衆の数に入ることを獲」と述べられている。

いったい〈宝海〉という語は、典拠はどこにあるのだろうか。〈宝海〉は、恐らく様々な仏典のなかに見出すことができるであろう。だが親鸞の場合には、やはり『浄土論』の一節、「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」に淵源しているに違いない。この詞章は、曇鸞が「不虚作住持功徳」と名づけて重視して以来、浄土教の諸師によって常に注意されてきた箇処である。親鸞もまた「不虚作住持功徳」の意義について、『尊号真像銘文』や『一念多念証文』で解説しているが、そのほか、たとえば次の和讃が想い起されるであろう。

本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし　（高僧和讃）

この一首では、「功徳の宝海」と「煩悩の濁水」が照応し、本願力が働らいて〈濁水〉が〈宝海〉に転ぜられると詠われている。この本願力の廻転の働らきについては、熟慮しなければならない重要な事柄が含まれている。したがって以下に僅かながらも問題点を拾ってみよう。

三

承知のごとく、晩年の親鸞は「自然法爾」という語を愛用した。そのことから聖人の信仰の最後の帰着点は「自然法爾」である、としばしば見做されてきた。それではこの「自然法爾」は〈海〉の思想とどのような類縁関係にあるのだろうか。

〈自然〉の思想が顕著なのは『大無量寿経』である。康僧鎧の翻訳と伝えられる漢訳『大無量寿経』には、自然という語は、実に五十数回も見出される。この〈自然〉を検討するとき、〈海〉と対照して誰しも気がつくことがある。それは両者の意味幅が殆んど同じということである。しかし中国の思想的伝統からす

れば、〈自然〉は、〈海〉という語にはない広がりと深さがあるといえよう。ともあれ、この両者に共通するのは、明と暗の二面があるという点である。〈自然〉の含む内容は、『大無量寿経』の用語法に照らすと、三つの性格、(1)無為自然 (2)願力自然 (3)業道自然――があるとされる。これは伝統的な区分であるが、この方軌に随えば、無為自然は明の側面を、業道自然は暗の側面を代表することになる。

われわれが注目したいのは、明暗二極の乖離を架橋する力用的な働らき、願力自然である。親鸞の「自然法爾」説を構成する中心原理は、この願力自然である。

「自然」といふは、「自」は「おのづから」といふ。行者のはからひにあらず。「然」といふは「しからしむ」といふことばなり。「しからしむ」といふは、行者の計にあらず。如来の誓にてあるが故に「法爾」といふ。「法爾」といふは、この如来の御誓なるが故に然らしむるを「法爾」といふなり。

（『末灯鈔』）

この一節からも明らかなように、親鸞の〈自然〉の解釈で最もユニークな点は、「然」を「しからしむ」と読解して、『大無量寿経』の〈自然〉が、形容詞や名詞だけでなく、動詞の機能も含んでいる、と見抜いたことにある。親鸞にとって、阿弥陀仏の廻向の働らきは、自然に内在する道理とは別な〝何か〟ではなかった。この自然の「しからしむ」働らきこそ、本来的には、「転」「転入」の論理と同じ軌にあり、ときに海のイメージを介して表現されるのである。

「転ず」といふは、罪を消し失はずして善になすなり。よろずの水大海に入りぬれば、即ち潮となるが如し。弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功徳を得しむるが故に「しからしむ」といふ。始めて功徳を得んと計らはざれば「自然」といふなり。

（『唯信鈔文意』）

《海の自然原理で重要なひとつは、その自浄作用である。海洋は世界最大の、そして最も効率的な浄化槽である。海水はあらゆる有機物を溶解し、分解し、同化し、吸収する。その海洋生態系の自然作用の過程には、様々な微生物の活動が付随する。海は天然のフィルターとしての機能を有しているのである》

「転」の論理は、この海の自然原理と無縁ではない。それは海の自然原理の素朴な古典的な解釈であるとも考えられる。「悪を転じて徳を成す」（総序）如来の本願力は、そのまま廃棄物を浄化・再生する海の循環システムと二重写しになってくる。このパターンを代表する他の例として、たとえば正像末和讃の「弥陀誓願の広海に、凡夫善悪の心水も、帰入しぬればすなはちに、大悲心とぞ転ずなる」が挙げられるであろう。「転」の論理は、小乗仏教の〈死の思想〉から大乗仏教の〈生の思想〉へのコペルニクス的な転回を可能にした決定的な論理である。なかんづく一乗思想は、その論理の中核を成した思想として、大乗思想史を振り返るとき、看過してはならぬ重要性を荷っている。

＊　＊　＊

「一乗海」と言ふは「一乗」は大乗なり、大乗は仏乗なり、一乗を得る者は阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提とは即ち是れ涅槃界なり、涅槃界は即ち是れ究竟法身なり、究竟法身を得る者は即ち一乗を究竟するなり、異なる如来無ず。異なる法身無ず。如来は即ち法身なり。一乗を究竟ずる者は即ち是れ無辺不断なり。大乗は二乗・三乗有ることと無し。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗は即ち第一義乗なり。唯是れ誓願一仏乗なり。　（行巻）

一乗海釈を展開するにあたり、それに先立って、親鸞は『涅槃経』の四文と『華厳経』の一文とを引用している。この事実は、親鸞の一乗思想が表立っては涅槃・華厳の伝統を承けていることを示すものである。親鸞が一乗思想に触れるきっかけとなったのは、二九歳まで修学した叡山時代である、と考えて差しつかえあるまい。しかし『教行信証』で親鸞が明らかにしようと願ったのは、〈聖道の一乗〉ではなく〈浄土の一乗〉である。「一乗究竟之極説」「真如一実功徳宝海」「一乗真実之利益」。いずれも『教行信証』の自釈に見える言葉であるが、親鸞にとって一乗思想がどれほど重い意味をもっていたか察せられるであろう。「一乗釈」は、いま「誓願一仏乗」をもって結ばれているが、本願円頓一乗こそ親鸞の思想が到達した大乗論の頂上である。そして次に示された「海釈」は、その大乗論を具体的に論証している。

「海」といふは、久遠より已来、凡聖所修の雑修、雑善の川水を転じ、逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実・恒沙万徳の大宝海水と為す。之を「海の如し」と喩ふるなり。良に知んぬ。『経』に説きて「煩悩の氷解けて功徳の水と成る」と言ふが如し。「願海」とは、二乗雑善の中・下の屍骸を宿さず。何に況んや、人天の虚仮・邪偽の善業・雑毒雑心の屍骸を宿さん平。　（同上）

一乗思想を海のイメージで解釈すること、それは親鸞の独創ではない。というのは「我・菩薩蔵・頓教・一乗海に依る」（『観経疏』玄義分）という善導の信仰告白があり、親鸞がその箇処を引用しているからである。親鸞の一乗海の思想は、一乗釈は華厳・涅槃の教学を承け、海釈は『浄土論註』衆功徳成就（前掲）を参照しつつも、最も根源的には善導の信仰的立場に拠るものであろう。人間の無始以来の罪業性は、一乗海に帰することによって、すべてが善業に転ぜられるという。小論の初めに、オルデンベルグの『仏陀』を引いて、海の思想について初期仏典（正確には仏典とは言えないが）の一例を紹介したが、海の古典的な考え方は、仏道の歴史に錬磨されて、善導を径て、一乗海の思想に結実したことが了解される。

この一乗海の思想を親鸞はさらに敷衍して、念仏門の位置を一層鮮明にしている。それが次に示された「二行四十八対」の判釈である。ここでは仏教は大きく念仏と諸善という二つの思想系列――難易対・頓漸対・横超対など四十八――に分類され

ている。小論でこれについて考察するスペースはないが、親鸞がこの判釈で採った二分法(dichotomy)は、たんに両者の立場を争うといった態のものではなかろう。むしろ対立的な立場を止揚したところに開かれるのが「円融満足・極促無礙・絶対不二之教」すなわち〈本願一乗海〉ではないだろうか。

「二行四十八対」と並んで、親鸞は、人間存在(機)についても、二つの価値系列——正邪対・是非対など十一——に類別している。この「二機十一対」の判釈は、最後に「然るに一乗海の機を按ずるに、絶対不二之機なり」と結ばれているが、われわれはこの明快な親鸞の断定に、彼独得の弁証法的な思想の流儀を見出すことができる。かくして、すべての対立を和解する一乗海は、最大の讃辞を献げられるのである。

敬うて一切往生人等に白さく、弘誓一乗海は、無碍・無辺・最勝・深妙・不可説・不可称・不可思議の至徳を成就したまへり。　(同)

一乗海の思想は、人間を相対差別という人為の世界から解放し、在家出家・男女貴賤の差別なく平等に涅槃の世界に誘引するという、画期的な理論である。周知のごとく、東洋思想史のうえでは、「一者」「渾頓」を説いた荘子の万物斉同の立場がすでにある。一乗海の思想は、ある面において、あらゆる差別を否定した荘子の思想に相通ずるものがある。ただ一乗海の思想がアナーキーな肯定思想でないことは注意しなければならない。金子大栄師は、一乗海の思想を「万人同帰の一乗」と銘打っておられるが、この親鸞の見解には極めてラディカルな人間思想がある。

ところで、一乗海の思想と同時に、われわれが看過してはならないのは「海一味」の思想である。あらゆる河川は、海に流入すると、個別的な水の味を失って同一の塩水に転ずる。「海一味」という語は、この自然の作用を示すものである。親鸞は正信偈に「凡聖逆謗斉廻入　如衆水入海一味」と述べ、正像末和讃に「名号不思議の海水は、逆謗の屍骸もとどまらず、衆悪の万川帰しぬれば、功徳のうしほに一味なり」と詠んでいる。この説が仏教の伝統的話法(とくに『浄土論註』性功徳成就)に負うものであることは言うまでもないが、結局「海一味」の思想に親鸞の一乗海論も納まることは確かであろう。「海一味」の真実に学んだ仏教の伝統的な方法には、大袈裟な言い方をすれば、一種の〈生態学的思考〉すら伺われる。

＊　＊　＊

信仰とは、畢竟論理の問題ではない。信仰は挙体的な事実である。肉体に裏打ちされない信仰は、やはり力のないもの、生きる支えとならぬもの、と言わなければならない。親鸞の苦難に満ちた信仰の歩みは、親鸞みずからによって、〈三願転入〉と述懐されている。すなわち、親鸞の精神遍歴(histoire de l'âme)は、『大無量寿経』の第十九願(双樹林下往生・邪定聚の機)に出発して、次に第二十願(難思往生・不定聚の機)を通過し、最後に第十八願(難思議往生・正定聚の機)に辿り着いた。

この〈三願転入〉を親鸞は「転=入選択願海」と表現している。それは粉れもなく海のイメージである！　われわれはこのイメージをもう少しふくらませてみることもできよう。たとえば、十九願の岸辺から出帆した船が、二十願の難所を突破して、最後に十八願の入江に到着した、というように。親鸞にとって、魂の航海は決して順風満帆というわけではなかった。とくに第二十願から第十八願への転入は辛酸を極めた。

第十九願から第二十願への進路は、諸善万行から称名念仏への方向である。この魂の船出には回心という重大事件が出発点にあるが、この旅立を大きく動機づけるのは、「理深くして解微なる」（『安楽集』）と言われたような末世の自覚であろう。しかし専修念仏への帰依は、末法という外在的な動機にもとづくかぎり、自我肯定の根元を断ち切ることが難かしい。結局この航海は逃避行に終るかも知れないのである。

宗教的精神の自発性は、第二十願から第十八願の針路へと大胆な旋回をとげる。それは〈光明の海〉へと目差す航海であり、途中には烈しい倫理的葛藤が津波となって押し寄せてくる。魂は闇の奥深く吸い込まれてゆく。海は狂暴な姿を見せ始める。メフィストフェレスのように洪笑する風は、魂を一瞬のうちに海面に叩きつけようと企らむ。

悲しい哉、垢障の凡愚、無際自従已来、助・正間雑し、定散雑はるが故に、出離其の期無し。自ら流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰し叵く、大信海に入り叵し、良に傷嗟す可し、深く悲嘆す可し。（化身土巻）

底無しの自我執着と罪障性に、親鸞は慄然としている。この懺悔は感傷的な告白ではない。現場からの歴史的な証言である。魂は難波して最悪の危機に見舞われる。だが内的葛藤の嵐に身も心も苛まれながら、いつしか親鸞は二十願の難所を切り抜け、十八願の難思議往生を成し遂げる。闇は徐々に消えて、陽がかすかに射し始める。船は、快よい潮鳴りを聞きながら、西に帆走し続ける。第十八願の〈光る入江〉への転入は、親鸞が感動を込めて述懐するところによれば、「不果遂者」の弥陀の誓願が追い風になっている。

然るに今特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入し、速に難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓、良に由有る哉。

爰に久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝せんが為に、真宗の簡要を撫うて、恆常に不可思議の徳海を称念す。弥斯を喜愛し、特に斯を頂戴するなり。（同）

親鸞の生涯をかけた求道の大団円がここにある。世界は嘘のように晴れ上り、海原は、慈悲と優しさをたたえて、彼岸へと導く海路になる。

セバンティ　アン　まさに奇蹟だ！
ファーディナンド　海はおどかしはするけれど、情け深い。私はいまで理由もないのに、海を呪っておりました。
（『ザ・テンペスト』五幕）

＊　＊　＊

親鸞の〈三願転入〉を海と船のイメージで解釈することは、あるいは常軌逸脱と見做されるかも知れない。だが古来魂のゆくえを水に浮ぶ船に喩えて具象化するという方法は、珍らしいことではない。民俗学の視点から見れば、いくつものケースが指摘されるであろう。たとえば日本人は盆に供物や飾りをのせて川や海に精霊船を流す。この風習は魂と船の伝統的な親近性を暗示するものではないだろうか。あるいは大洪水からノアとその家族を救った函船は象徴として考えられないだろうか。

船は仏教においてしばしば譬喩として用いられてきた。彼岸に渡る船のイメージが形成されたのは、とくに大乗つまり〈大きな乗物〉という思想が出現してからであろう。「陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち楽しきが如し」「彼の八道の船に乗じ、能く難度の海を度す、自ら度し亦彼を度せん」（易行品）と龍樹は教示している。この系譜を承け、親鸞も漠海に浮ぶ船のイメージを胸に懐いた人であった。親鸞には弥陀の誓願は「難度の海を度する大船」（総序）と映った。この〈おほきなる船〉のイメージこそ、親鸞の他力の心境を最も的確に表現していると考えられる。

弥陀の願力は生死大海のおほきなるふね・いかだなり、極悪深重の身なりとも歎くべからずとのたまへるなり。

（『尊号真像銘文』）

ほかにも親鸞の著作のなかで、船に関する譬喩は少なくない。「横はよこさまにといふなり、超はこえてといふなり、これは仏の大願業力の船に乗じぬれば、生死の大海をよこさまに超えて、真実報土の岸に著くなり」（『一念多念証文』）。あるいは「弥陀観音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死の海に浮みつつ、有情をよばふてのせたまふ」（正像末和讃）など。

四辺を海に包囲された日本人にとって、船は格別親しいものである。日本へ異国の文化――民族学的の意味で、経済・政治・宗教・芸術・言語など――を運んできたものは、いうまでもなく船であった。国内のいろいろな交流にもまた船が大きな役割を演じてきた。越後から東国へと旅立った親鸞は、東国で船に乗って巡教したと伝えられる。たとえば真宗に坂東節という独得な声明法がある。その声明は身体を前後左右に揺り動かしながら唱うのだが、その由来は親鸞（一説には蓮如）が関東を巡教したおり、一日船中で過し、暴風のなかで船中の人々と称名念仏した故事にならったものだ、といわれる。親鸞における船のイメージは、もしかすると、このような経験に醸成されたのかも知れない。

四

親鸞にとって、海とは一体何であったろうか。以上を見ても明らかなように、海は譬喩や仮構にとどまるものではない。何かしら圧倒的な力を親鸞の内面に行使した実体である。海は想像力の源泉であり、親鸞が自ら到達した真実を開示するために、

必要欠くべからざるシンボルだったのであろう。いや却って、海の象徴化を通して、真実に到る途を発見したと考えられないこともない。海と信仰。両者は、互いに媒介し合い浸透し合いながら、それ自身が浄土世界のリアリティを顕現している。

爾れば、大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢の徳にしたがふなり。知る可し。（行巻）

この詩趣に富んだ一節は、信仰的世界と海の光景がオーヴァー・ラップして、本願の論理を美事に視覚化している。「大悲の願船」「至徳の風」は、単なる例でもなければ、また譬喩でもない。それがそのまま親鸞の自覚のぎりぎりであり、普遍の真実であり、絶対の真理である。もし二つの文脈を切り離して、この内容を文章化しようとすれば、そのセンテンスは恐ろしく冗慢なかつ緊張感を欠いたものになってしまうだろう。

あるイメージを直接に文脈に導入して、ひとつの事柄を一層具体的に明瞭に表現しようとする文章技法。それは「隠喩」(metaphor)である。メタファーは、一般に言葉を飾るための技巧だと考えられがちであるが、そうではない。むしろわれわれが事実や真実を認識するためにどうしても必要な手順である。メタファーの語源、ギリシア語の metaphora は、「越えて」(meta)「運ぶ」(pherein)を意味する。親鸞の言語世界は、時折メタファーが有効に機能している。それは道元ほど磨かれてはいないが、和讃や感動的な表現に顔を出すことが多い。とりわけ〈海〉がメタファーとしての重要な機能を荷っていることは、いままで見てきた通りである。そのほか擬人法などの「換喩」(metonymy)なども用いられる。また古典から引用する「寓喩」(parable)——二河白道の喩や伊蘭林の喩など——は、とくに大きな役割を果している。「〜の如し」というような「直喩」(similie)も見逃すことはできない。要するに、親鸞の言葉の世界は、豊饒なイメージの海なのである。現代人が親鸞を理解するためには、彼の内面のイメージを正確に把握し、それを現代のイメージに翻訳するという作業が必要ではないだろうか。